

# ラブアンIBFC 日本企業向けセミナー開催

## アジアにおけるキャプティブマネジメント

### 企業グループのリスク集約で検討も

マレーシア・ラブアン島にある金融経済特区のラブアン・インターナショナル・ビジネス・フアイナル・センター(ラブアンIBFC)は6月19日、東京都中央区のベルサール東京日本橋で「アジアにおけるキャプティブマネジメント」をテーマにした日本企業向けセミナーを開催した。近年、リスクマネジメントのツールとして設立に向けて動き出すアジア企業が増えているキャプティブ保険会社の仕組みや、アジアのドミナイル(設立地)として注目が集まっているラブアンの魅力について、ラブアンIBFCの役職者や実務家などが解説した。当日は、キャプティブに関心を持つ日本企業などから約100人が参加した。



約100人が参加



クロスビー氏

セミナーの冒頭、ラブアンIBFCのファラー・ジャファー・クロスビーCEOが、「本日は、日本企業の皆さまにラブアンについてお話しする機会を頂き、非常に光栄に思う。また、ぜひこの機会にキャプティブについてご提案させていただければと思う」とあいさつしてから、「アジアにおけるキャプティブの成長と受け入れられてきた背景」をテーマにプレゼンテーションを行った。クロスビー氏は、世界のキャプティブの統計や日



ウンディカイ氏

本企業の設立状況、また、ラブアン島やラブアンIBFCの概要、さらに、どのようにしてキャプティブが企業のリスクマネジメントに役立つかについて紹介した。最後に、キャプティブドミナイルとしてのラブアンの強みとして、透明性や国際基準のコンプライアンスに基づくビジネスの実体性と、守秘義務や立地



三井氏

など顧客利便性とのバランスの良さを挙げ、「ラブアンは1990年から約30年かけて成長してきたが、今後さらに、アジアのビジネスを仲介するプラットフォームとして使ってもらえればと考えている。私たちは、経済特区であると同時に、非常にしっかりした法・監督体系を有するミッドショーアのビジネス・ファイナンス・センターとして、これからもアジアをリードしていく存在でありたい」と述べた。



パネルディスカッションを実施

次に、三井法律事務所

の三井拓秀氏が「日本のキャプティブの変革・挑戦として機会」をテーマに講演。クロスビー氏の上で、ラブアンで設立された日本企業のキャプティブ子会社を事例に、キャプティブ設立の目的や要件、コスト、また、親会社の意思決定やファイリビリティスタディ、規制当局との面会和申請書類の届出などキャプティブを設立・運営する上で必要となるオペレーションについて、同社の業務の紹介を交えながら解説した。

最後のセッションとして、日本企業のキャプティブ設立を支援する保険仲立人ジャパン・リスク・スペシャリストの荒木直義代表の進行でパネルディスカッション「アジアにおけるキャプティブマネジメント」を実施した。ウンディカイ氏は冒頭、「皆さまとお会いできて、また、満席の会場でラブアンや当社の紹介ができて非常にうれしく思う」とあいさつした上で、ラブアンで設立された

イブラヒム氏は、欧米に比べてアジアでキャプティブがまだ発展していない理由について問われると、「キャプティブが世界中に何千社もあるのに、ほとんどがカリブ海やヨーロッパで、アジア太平洋地域ではまだ数百という規模にとどまっているのは、アジアでキャプティブビジネスがまだ成熟しておらず、新しい考え方なのだ」と認識している」と回答。一方で、「昨今、アジア企業の間でもキャプティブへの関心が高まっており、例えば、ASEAN諸国の企業グループでは同族企業が多く、グループ内のあらゆるところにあるリスクに対して各事業会社がバラバラに保険加入しているような状況だった。しかし近年、そうした企業グループでリスクを集約的に把握する手段として、キャプティブ設立の検討を行うような動きがみられる。私たちラブアンIBFCでは、従来からあるキャプティブ設立の好条件に加え、新たにキャプティブ・マスタープランなどを策定して、キャプティブを検討している企業に提案し、誘致できるように考えている」と述べた。

全セッション終了後は交流会が行われ、スピーカーと参加者は積極的に意見交換した。同セミナーは、21日に大阪・中之島フェスティバルタワーでも開催され、約70人が参加した。